CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kanazawa University Repository for Academic Resources

氏　　名	陸　　艺　娜
生　年　月　日	
本　　籍	
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	人博甲第 12 号
学位授与の日付	平成 23 年 3 月 22 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 4 条第 1 項）
学位授与の題目	日中両言語における受動文体系の対照研究 －事象構造の観点から－ A Contrastive Research on the System of Passive Sentences between Japanese and Chinese －From the Viewpoint of Event Structure－
論 文 審 査 委 員	委員長　大　瀧　幸　子 委　員　加　藤　和　夫，柘　植　洋　一 岩　田　　礼，新　田　哲　夫 堀　田　優　子

学 位 論 文 要 旨

受動文は従来ヴォイスの範疇において、能動文と対立した文型として捉えられてきた。受動文に関する先行研究のほとんどが，対応する能動文の有無を基準とした二分法に縛られてきた。また、受動文の主語は「動作行為の受け手」いうプロトタイプ的な考え方で捉えられてきた。従来の日中受動文対照研究はこのような捉え方をそのまま援用し、中国語受動文体系に存在する非必須意味役割を主語とする受動文や動詞意味フレーム外の要素を主語とする受動文の存在が等閑視されてきた。非必須意味役割を主語とする受動文の分析を抜きにしては、日中両言語の受動文体系の間の真の不均衡を見出すことができない。また、「間接受動文」の概念が存在しない中国語には日本語のそれに対応する受動表現がないとされてきたが、実際は動詞の意味フレーム外の要素を主語の位置に立て、複文形式の受動文が構成されうることは取り上げられなかった。従来のこのような考察方法では、日中両言語の体系の異同を正確に認識できないと考えられる。

筆者は、従来の日中受動文対照研究の問題点として以下の 3 点を指摘する：(1)日本語の受動文マーク（[-are-]）を無条件に受動ヴォイスを表す文のマークとみなすこと、(2)中国語受動文の範疇を単文の被字句または迂言的受動文、自然受動文のみに限っていたこと、(3)中国語受動文の主語を受け手として捉えること、の 3 点である。これらの問題点を解消するには、日中両言語の受動文体系を再整理することが必要だと筆者は考える。そこから日中受動ヴォイスの表現形式の対応関係を見直すことができるのではないかという問題意識が本研究の出発点である。

本研究の目的は、(1)日中両言語の受動文の事象構造を解析し、認知モデルとして図式化すること、さらに、(2)同一基準に基づき、両言語の受動文体系の違いを考察した上で、受動文認知モデルのネットワークを構築することである。以下各章の要旨をまとめる。

第 1 章では、両言語に共通した受動ヴォイスの定義を立て、それぞれの考察対象を定めた。本研究においては、受動ヴォイスを以下のように定義する。

受動ヴォイスとは、アクションチェーンのエネルギー源ではなく、エネルギーを直接または間接的に受ける要素に焦点を置き、その要素に生じた変化過程または結果状態を捉える認知方式である。

上記の受動ヴォイスの定義に基づいて、受動文を以下のように定義する。

ある文において、文の主語に位置するものがエネルギー源になりうる他者による動作行為の影響下にある場合、その文を受動文と認定する。

そこで、本研究では、定義にしたがって、日本語の受動文の考察対象として以下の類型を扱う：

(1)利害関係が関わる受動文
　a.受動文マーク[-are-]を持つ文：受影受動文
　b.受動文マークを持たない文：
　　迂言的受動文
　　語彙的受動文
(2)利害関係が関わらない受動文
　(2)-1 降格受動文
　　a.受動文マークを持つ文
　　b.受動文マークを持たない文：
　　迂言的受動文
　　疑似受動文
　(2)-2 属性叙述受動文
　　a.受動文マークを持つ文
　　b.受動文マークを持たない文
　　迂言的受動文

また、本研究では、中国語の受動文の考察対象としては以下の類型を扱う：

(1)利害関係がかかわる受動文
　a.受動文マーク「被」を持つ文（被字句）
　b.受動文マークを持たない受動文
　　自然受動文
　　迂言的受動文（「給」「受到」「遭到」などが用いられる）
(2)利害関係が関わらない受動文
　a.受動文マーク「被」を持つ文（被字句）
　b.受動文マークを持たない受動文
　　迂言的受動文（「受到」「得到」などが用いられる）
　　自然受動文；
　　「是……的」構文；
　　存現文

第2章では日中受動文の各自の体系を考察した。主語に位置する要素の意味役割に基づき、それぞれの受動文の各類型を整理し、日中受動文体系の真の対応関係を究明した。
日中受動文の異同をまとめたところ、もっとも大きな違いは①動詞の意味フレームの中の非必須意味役割要素の昇格可否、②構文形式の段階的な違いの有無という2点にあるという結論を得た。

①中国語では、必須意味役割要素、非必須意味役割要素、動詞の意味フレーム外の要素を受動文の主語に昇格させることが可能である。これに対して、日本語では、必須意味役割要素と動詞の意味フレーム外の要素を昇格させることが可能だが、非必須意味役割要素を昇格させることができない。日本語では、動作行為の道具、場所、時間など非必須意味役割要素を主語とした受動文は欠如している。この点においてこそ、日中両言語の受動文体系の真の不均衡が存在すると筆者が考える。

②日本語において、主語に位置する要素はアクションチェーンと意味的に直接的または間接的な関係を持つが、しかしいずれも必須意味役割であり、意味の違いに伴う受動文の構文的な違いは見られない。

中国語において、受動文の構造は主語の意味役割とアクションチェーンの関係が直接的であるか、間接的であるかに大きく左右される。ある要素を受動文の主語位置に昇格させる際、動詞と緊密な関係にある意味役割要素が優先される。ある要素を主語とする受動文が特定の文法構造や文脈的意味を明記する必要性が高くなればなるほど、その要素の昇格容易度が低くなる。この基準に基づき、各要素の昇格容易度は以下のように判定できる。

動作行為の受け手＞動作行為による生産物（第 4 章で扱う）＞動作行為の非必須意味役割要素（道具＞場所＞時間）＞動詞の意味フレーム外の要素

受動文の事象構造の認知モデルが複雑化してゆくにともない、（文末の図 1 を参照）、受動文の文型も複雑化する。

第 3 章では第 2 章を踏まえ、利益関係がかかわる受動文を取り上げ、日中受動文の各自の成立条件を精密に考察した。受動文としての状態命題、過程命題の特徴を維持するために、両言語はどのような言語形式が求められるかを分析した。その結果、迂言的受動文（日中両言語とも単語レベルでイベント抱合を表す）の場合を除き、以下のような大きな違いが存在する：日本語受動文の原因事象と結果事象[1]のイベント抱合は単語レベルで表されるのに対して、中国語受動文の原因事象と結果事象はフレーズレベル（動補構造）と文レベル（複句文）で表される。

①日本語の受動文において、原因事象と結果事象のイベント抱合は単語レベル（動詞の受身形[2]）で表され、受影者の変化過程や結果状態などを必ずしも別個に言語形式化する必要がない。よって、受動文マークを持つ受影受動文は構文上均一性を呈している。動詞の受身形に含意された「必須意味役割または意味フレーム外の要素に関する受益あるいは損害などの語義情報」によって、過程命題または状態命題が構成されるのである。

②中国語の受動文において、動補構造を用いた述語で構成される単文形式のものと複文形式のものがある。

②-1 動補構造を用いた述語で構成される単文形式の受動文では、原因事象と結果事象がフレーズレベルでイベント抱合し、状態命題または過程命題を構成する。この類型の受動文では、必須意味役割を担うか、非必須意味役割を担うかにかかわらず、動詞の意味フレーム内の要素は主語位置に昇格し、単文受動文を構成することが可能である。また、受動文の命題型は動補構造の補語の意味合いまたは指向性によって左右される。

受け手、動作主指向の動補構造で構成される受動文の命題型は過程命題にも、状態命題にもなりうる。しかし、受け手指向の動補構造で構成されるのは典型的な受動文であるのに対

---

[1] 原因事象は動作主による動作行為で、結果事象は受影者に生じる変化である。

[2] 動詞語幹＋[-are-]

し、動作主指向の動補構造及び過分義を表す動補構造で構成されるのは周辺的な受動文である。また、動作行為指向の時量補語と動詞で構成される受動文は過程命題から派生した「遍歴命題」である。

一方、非必須意味役割要素を指向する補語が付く動補構造を用いた述語で構成される受動文は中国語独特の受動文である。プロファイルされた受影者はアクションチェーンの本線以外のところに位置づけられることを反映するために、アクションチェーン本線上の事象を言語形式化することが常に必要とされる。すなわち、単文ではあるが、過程性を前面化した複雑な受動文が構成される。

②-2 中国語の複文形式の受動文を日本語の間接受動文と比較した場合、日本語では、単文の直接受動文によって表現できるが、中国語では、文脈照応で原因事象と結果事象を別々の分句で言語形式化する必要がある。

上記の分析を元に、日中両言語の利害関係がかかわる受動文の事象構造認知ネットワークを図1のように構築した。

第4章では利害関係が関わらない受動文を取り上げた。日本語の降格受動文（疑似受動文テアル表現を含める）、属性叙述受動文と中国語受動文の「是……的」構文、存現文を中心に、両言語の対応関係を考察し、それぞれの事象構造の認知モデルを解析した。その結果、これらの類型は受動文体系において周辺的なものであると認定した。また、各類型の受動文の構文特徴と日中表現を比較し、それぞれの対応関係を図式化した（文末図2を参照）。さらに、各類型の事象構造の認知モデルを解析し、そのネットワークを文末図3のように構築した。

①両言語の迂言的受動文及び論述文に使用される受動文マーク（-are-,被）を持つ受動文が互いに対応する。

②日本語の無題の生産物主語受動文は場所要素が明示されている場合、中国語の存現文A（生産性動詞で構成する存現文）に対応する。場所要素が明示されない場合は自然受動文に対応する。

③日本語の無題の非生産物主語受動文の内、「ある場所に位置させる」ことを含意する動詞述語を用いた受動文（疑似受動文テアル表現を含む）は中国語の存現文B（配置動詞で構成される受動文）に対応し、ほかの動詞で構成するものは中国語の自然受動文に対応する。

存現文A、Bにおいて、存在状態のみが認知スコープに収められ、状態命題を表すため、事象構造において、動作行為が終わる前の事象は欠如している。

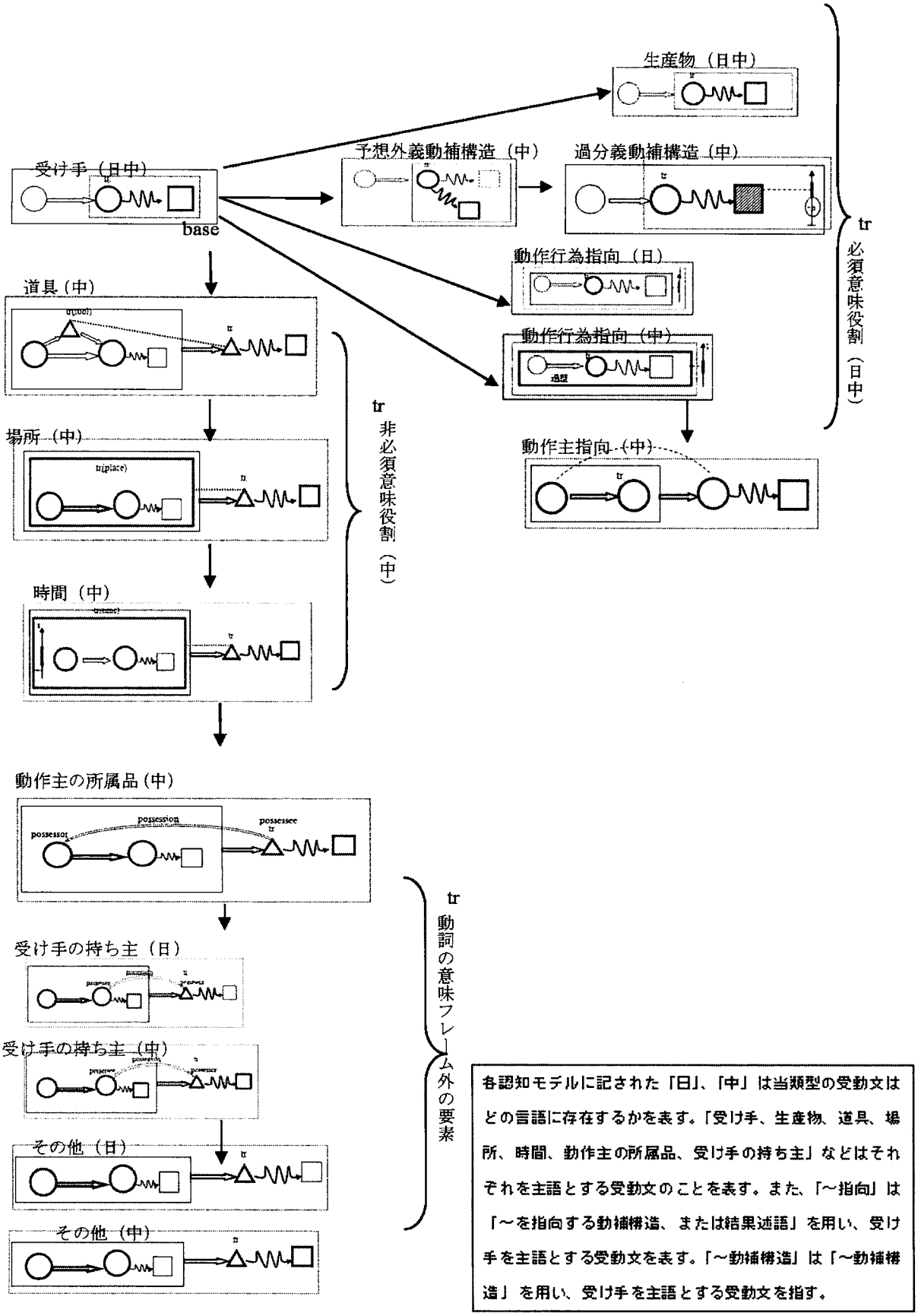
④日本語の有題の受動文に関しては、中国語の自然受動文にも「是……的」構文にも対応できる。その構文の選択は事象構造の捉え方によって左右される。自然受動文を選択する場合、変化過程または結果状態が認知スコープ内に収められる。「是……的」構文を選択する場合、意味役割要素のみが焦点化され、文の主語に位置するものの示差的な特徴を表す。この示差的特徴は状態と属性の間の中間的なものとして認定し、「是……的」構文は状態命題の受動文と属性叙述受動文の中間的なものとして位置づける。

⑤属性叙述受動文は時間軸を超越した恒常的な属性を主語に付加する。その内、選択系動詞で構成される日本語の属性叙述受動文は中国語の能動文に対応する。評価系動詞で構成されるものは、「受到」という動詞で構成される迂言的受動文に対応する。

図1と図3を比較すると、利害関係の有無に関する二つのネットワークにともに同じ認知モデルがベースとして存在することが分かる。二つのネットワークから派生される体系がそれぞれ異なるということである。このように、日中両言語の受動文体系を一体的な認知構造ネットワークとして把握することができる。

第5章は結語であり、各章のまとめ及び今後の課題について述べた。

図１　利害関係が関わる受動文の事象構造認知ネットワーク



各認知モデルに記された「日」、「中」は当類型の受動文はどの言語に存在するかを表す。「受け手、生産物、道具、場所、時間、動作主の所属品、受け手の持ち主」などはそれぞれを主語とする受動文のことを表す。また、「～指向」は「～を指向する動補構造、または結果述語」を用い、受け手を主語とする受動文を表す。「～動補構造」は「～動補構造」を用い、受け手を主語とする受動文を指す。

図２　利害関係がかかわらない受動文の日中対照

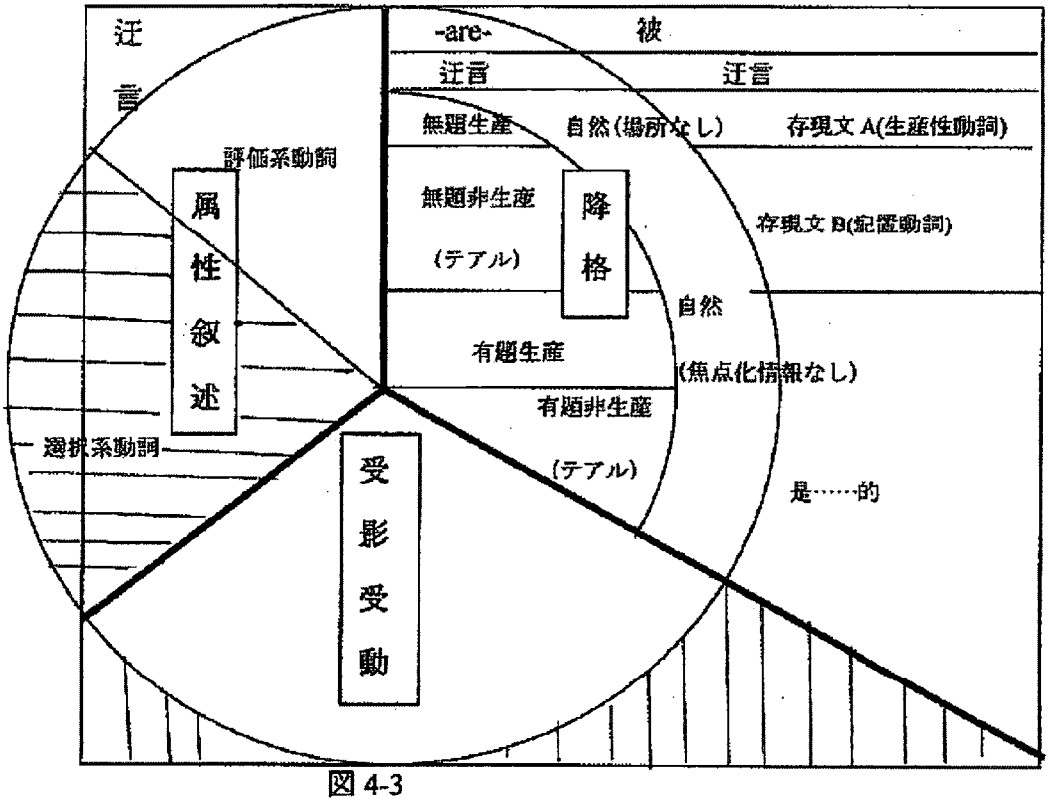


図 4-3

「無題生産」：無題の生産物主語受動文

「無題非生産」：無題の非生産物主語受動文

「有題生産」：有題文としての生産物主語受動文；

「有題」：有題の受動文。

「自然」：自然受動文（「場所なし」：文の中に場所関連の情報がない）

「迂言」：迂言的受動文

「是……的」：「是……的」構文

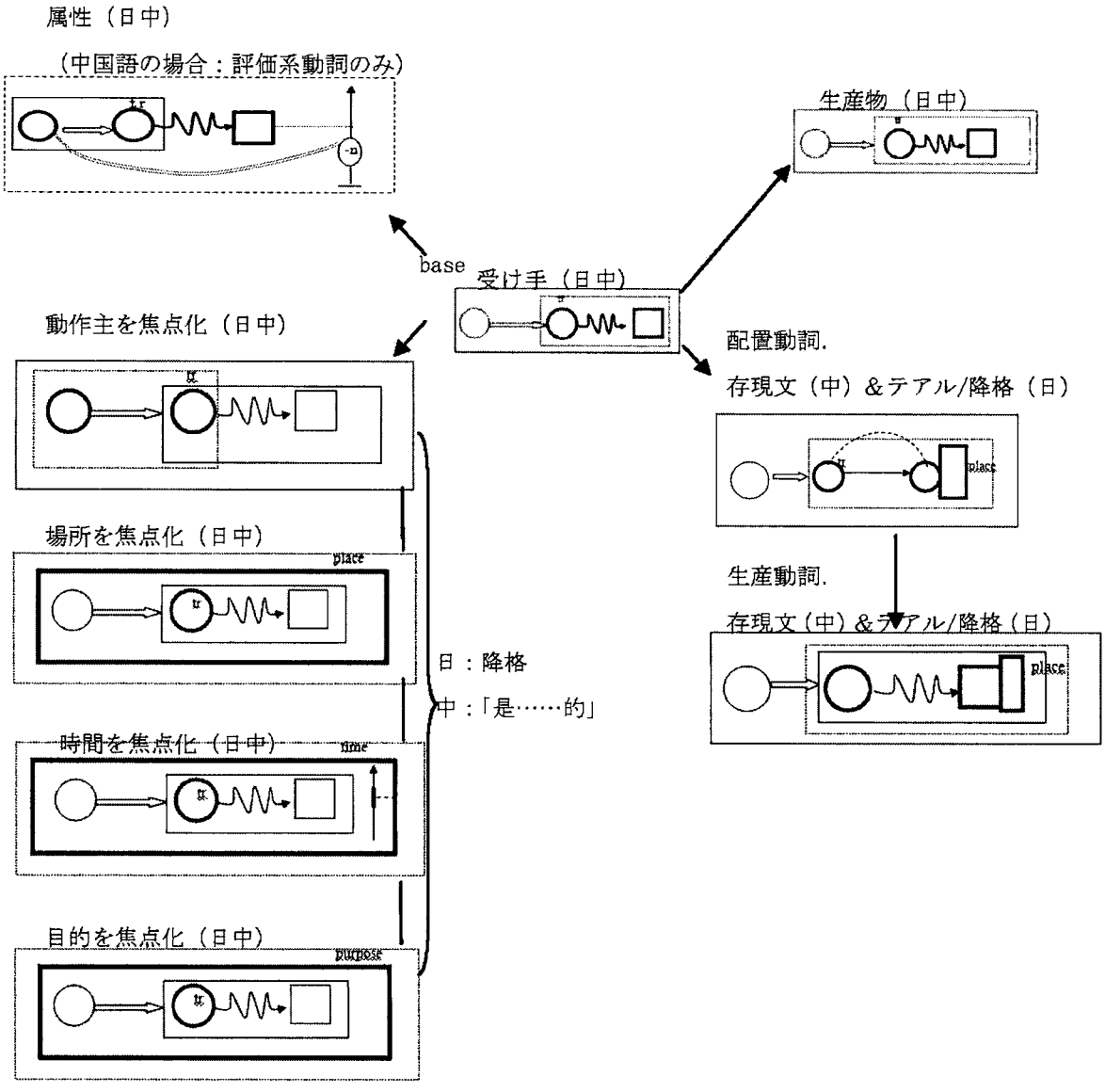
「被」（論述文）：論述文で使用される被字句

[-are-]：受動文マーク[-are-]を持つ日本語降格受動文

日本語特有ゾーン（選択系動詞の属性叙述）

中国語特有ゾーン（非必須意味役割を主語に）

図３　利害関係が関わらない受動文の事象構造認知ネットワーク



Abstract

In the Japanese passive sentences, there are only two types of subjects, one of which is the necessary semantic role, and the other is the element outside the semantic frame of the verb. The event conflation between cause event and result event are all shown on word level. The change process or the state about the object is suggested by the meaning feature of the verb.

In the Chinese passive sentences, besides on the necessary semantic role and the element outside the semantic frame of the verb, non-necessary semantic roles could also be the subject. A verb-complement construction is needed to show the change process or the state of the object. The event conflation is shown on grammatical level. When an element outside the semantic frame of the verb is promoted to be the subject, a complex sentence is needed to state the cause and the result separately, in which case, the event promotion is shown on the context level.

The paper also deals with the passive sentences for attribute predication, besides on the ones for event predication. And there are only circumlocution passive sentences in Chinese for attribute predication.

論文審査の結果の要旨

下記の如く課程博士学位論文審査要項（『人間社会環境研究科各種規定等集』平成21年度pp73-75）の「６．博士学位論文の審査基準と審査項目」に沿って、検討会および最終公開発表での議論を整理し、当該論文を金沢大学人間社会環境研究科後期博士課程から文学博士を授与するに値する論文と判定した。

評価基準（１）：本論文は筆者が博士前期課程より一貫して追求してきた、「日中両国語における受動表現を体系的に記述する」ことを目的としている。筆者はまず、受動ヴォイスを「アクションチェーンのエネルギー源ではなく、エネルギーを直接または間接的に受ける要素の方に焦点をおき、その要素に生じた変化過程または結果状態を捉える認知方式」と定義付けることにより、両国語における受動ヴォイスを表現する構文（受動構文）の諸形式を体系的に記述しようと試みた。しかし、従来の日本国内における受動文研究および中国語受動文研究では、日本語受動文の主語に「動作の受け手」しかたたないために、「受け手以外の動詞非必須意味役割を担う語」が主語の位置にたつ中国語受動構文の研究が等閑視されてきた。本論文はこの日本国内における受動文研究の閉鎖的状況を打破する方式を追究しようとするものであり、充分に学会に貢献しうる研究テーマを有すると評価できる。

評価基準（２）：自然言語の対照研究を行うにあたり、両者を「比較する基準」の立て方がその対照研究の良否を決定づけるのであり、もともと体系の異なる自然言語どおしを翻訳を介して対照するだけでは、個々の体系の本質を類型論的に記述することは不可能である。本論文は比較の基準として認知言語学が近年研究を積み重ねてきた「事象構造の図解」を採用し、そのことにより両言語の受動構文の意味の異同を、抽象的、客観的視点から記述することを試みた。

自然言語の意味を自然言語で記述、解明しようとする意味論は、論理矛盾を内包するものであり、言語の意味の研究は本来自然言語以外の記号によって進められるべきであろう。本論が採用した方法は、将来にわたりその記述の客観性を保持しうる方法であり、また、他言語における受動ヴォイス表現との類型論的比較研究へと発展させていくことも可能にする方法として高く評価できるものである。

評価基準（３）：筆者は日本語学における受動文研究を主に仁田義雄、益岡隆志、村木新次郎らの著作から学んだが、その手法だけでは中国語の受動ヴォイス表現を網羅して扱う基準をたてられないことに気づき、認知言語学の手法を学び始めた。また、中国語学界の受動表現の研究も、述語部分の述語結果補語構造を中心に考察を進めてくる伝統があり、その述語形式の研究から一歩踏み出し、日本語の受動表現との対照研究を可能にするためには、主語の位置にたつ意味役割を考察対象として重視するべきであると考えるにいたった。したがって、本論文は日本語学界、中国語学界における受動表現に関する先行研究を読破し、その壁を乗り越えるために認知言語学の手法のなかに対照研究の基準を求めたものである。その学究的歩みは極めて穏当で妥当なものであると評価できる。今後は更に、類型論の古典的著作と構造文法論の細心の研究成果についても知見をひろめ、研究を進展させることが望まれる。

評価基準（４）：本論文が扱う受動ヴォイス表現の用例は、２種類のパラレルコーパス（北京日本研究所作成 CJCS と金沢大学作成 GPS）と中国教育部語言文字応用研究所作成 Cylksearch, 及び国立国語研究所 KOTONOHA からの検索により取り出した。しかし、主語の位置にたつ意味役割が非必須意味役割、例えば「道具、場所、時間」の場合、コーパスの中からも適合する用例がみあたらない場合があり、その時は作例を用いてかつ、インフォーマントチェックを日本人中国人各10名に依頼して、日本語でも中国語でも日常表現として充分成立することを確認のうえ、考察対象にとりあげた。また、言語事実の確認を可能な限り客観

的な方法で行うことに注意を払い、当該受動文が用いられる発話環境、文脈など、受動表現が成立するための前提となる非言語情報も考察対象に含めた。その結果、受動ヴォイスが受動構文としてさまざまな言語形式をとる場合、前提となる非言語情報から「利害関係が関わる、関わらない」という重要な構文的意味が提供され、日本語受動文の体系では「受影受動文」と「降格受動文および属性叙述受動文」の対比が生じることを再確認した。同時に、中国語でも「(述語動詞によって特徴づけられる) 迂言的受動文」と「自然受動文」が両方の利害関係の有無に関する意味をともに持ちうるほか「是～的」構文と「存現文」は利害関係から切り離された受動表現であるという、構文的意味の違いを指摘した。このように言語事実を文の前提を含めて丁寧に考察することで、それぞれの構文的意味を記述する視点は、現代語の共時的研究に携わる場合、特に大切な視点だとして評価できる。

評価基準（5）：本論文では対照研究の比較基準として事象構造の図解を採用した。本論文の独創的な記述の多くは、この事象構造の図解により、日本語と中国語の受動表現のタイプを構文レベルで余すところなく抽出し、かつ構文相互の親疎関係を示すネットワークを構成しえた点にある。この類型論的記述方法を身に付けたことは、筆者の研究者としての将来を保証しうるものであり、今後、分析対照とする言語事実を変えながら更なる記述量の拡大が期待できる。しかしながら、比較対照研究及び類型論的言語研究の長短はともに、「仮説とその証明」という演繹的な議論展開を行わず、一定のルールによって可能限り機械的かつ帰納的に議論を展開していく点にある。筆者自身、事象構造による構文的意味の記述は、なにかの課題を解決するよりは「端的にわかりやすく構文間の異同を記述する」ツールとしての効用が大きいという限界を意識している。今後は、量的拡大を図ることに拠って、初めて質的違いが判然としてくるという類型論の高みを目指す努力を続けていくことが期待される。

評価基準（6）：本論文は、認知言語学の事象構造の図解を比較基準に据えることにより、従来の研究に見られなかった、日本語と中国語の受動ヴォイスを表現する構文の網羅に成功した。かつその構文相互の親疎関係をネットワークとして整理しえたことは、日中両国語の対照研究と類型論的研究に対して、一つの布石を置きうる論文として評価できる。ただ、今後に残る課題として、考察対象の例文を採集する時にはインフォーマントチェックをかけるだけでなく、必ず有意差検定をかける手順を踏んでから「言語事実として採用」するか否かを決定する必要があることを指摘しておきたい。